

Title	批判的社会言語学の対話 はしがき
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85077
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

はしがき

本プロジェクトは『批判的社会言語学の諸相』（2002 年度）、『批判的社会言語学の可能性』（2003 年度）、『批判的社会言語学の射程』（2004 年度）、『批判的社会言語学の展開』（2006 年度）、『批判的社会言語学の課題』（2007 年度）、『批判的社会言語学の実践』（2008 年度）、『批判的社会言語学の展開』（2009 年度）、『批判的社会言語学の領域』（2010 年度）、『批判的社会言語学の方法』（2011 年度）、『批判的社会言語学の構築』（2012 年度）、『批判的社会言語学の展望』（2013 年度）、『批判的社会言語学の軌跡』（2014 年度）、『批判的社会言語学の潮流』（2015 年度）、『批判的社会言語学のまなざし』（2016 年度）、『批判的社会言語学のメッセージ』（2017 年度）、『批判的社会言語学の思潮』（2018 年度）、『批判的社会言語学の探訪』の延長線上にある。また、『「正しさ」への問いー批判的社会言語学の試み』（野呂香代子・山下仁、三元社、2001、新装版 2009 年）、『「共生」の内実ー批判的社会言語学からの問いかけ』（植田晃次・山下仁、三元社、2006、新装版 2011 年）、『ことばの「やさしさ」とは何かー批判的社会言語学からのアプローチ』（義永美央子・山下仁、三元社、2015 年）とも深い関連を持つ。さらに、2012 年度から全学的に開始され、山下が運営統括委員、植田がプログラム担当者に名を連ねていた「未来共生リーディングプログラム」とも関連を持つものである。

2002 年に開始された本プロジェクトの出帆より 20 年近い歳月が流れた。この間、幾多の論文・翻訳によって、上掲のように「批判的社会言語学」の「諸相」・「可能性」・「射程」・「展開」・「課題」・「実践」・「領域」・「方法」・「構築」・「展望」・「軌跡」・「潮流」・「まなざし」・「メッセージ」・「思潮」・「探訪」に取り組み、今年度は「対話」をテーマとした。

2020 年初頭より瞬く間に世界中に広まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、2021 年 5 月現在に至ってもなお世界中で猛威を振るっており、我々の生活を一変させてしまった。比較的感染者が少ないとされてきた日本においても、医療の崩壊が現実のものとなろうとしている。このような状況においてもなお、政権上層部は東京オリンピックの開催に固執しているという。海外に目を向ければ、新型コロナウイルスをきっかけとして分断と格差の拡大がさらに進行しているようだ。これらの諸問題に不足していることの 하나가「対話」であることは明らかである。これまで我々は「対話」を怠ってきたのではないだろうか。本プロジェクトは、このような現代社会を「言語」と「社会」の関係を扱う社会言語学の立場で、研究者それぞれのテーマから「対話」の糸口を探しながら、批判的に論じようとするものである。

上田論文は、日本語における言語変種の呼称に関するものである。抽象的なレベルでは大陸ヨーロッパで話されているゲルマン系変種を例示しつつ「〇〇語」「〇〇方言」という類別詞にまつわる問題点を指摘している。また具体的なレベルでは“Deutsch”ならびに“Niederdeutsch”の多義性に言及し、うち後者については文脈やその指示対象、話者・筆者の見解によって使い分けるべき複数の和訳を提案している。

山下論文は、社会言語学が、国政レベルの言語政策に取り入れられないのはなぜか、という問題について考察したものである。特に、1) 言語学の知見が、政府にうまく利用されているとしても、十分に取り入れられているとは言えない、2) 政治の世界の言説を批判することはできても、そこに影響を及ぼすことはできていない、3) コミュニケーションのプラスの側面にばかり目をむけてきたため、具体的な社会問題にはあまり目をむけてこなかった、ということに焦点をあてて考察している。

呉論文は、多言語社会の台湾における「台湾語」といった名称がどのような言語を表すものかについて論じたものである。まず、台湾の公共交通機関・テレビ番組における言語使用を紹介し、その後、先行研究の調査結果を通じて台湾人の言語使用実態を示した。最後に、台湾で捉えられている「台湾語」そのものについて述べた。

柳田論文は、公共の場におけるコミュニケーションとジェンダーという問題を考える第一歩として、国会討論の分析を行った。参議院予算委員会における野党委員と閣僚との間の相互行為を取り上げ、フェイスワークと社交性の義務と権利に注目し分析することで、当該の相互行為においてジェンダーが関与性を持っているのか否かについて考察を行った。

小川論文は、ルクセンブルクにおいて住民と行政を結ぶ言語、特に書き言葉としてどの言語が選ばれるのかについて、昨年が続いて小規模な自治体の広報誌の言語選択を調べ、論じている。統合の言語として重視され、またインターネット時代になり書き言葉としての使用が増大するルクセンブルク語が公的な分野でも積極的に用いられていることを明らかにしている。また、小規模な自治体であっても外国籍住民のための情報保障としてフランス語が重要な位置にあることも示唆している。

植田の研究ノートは、2000年から2021年に刊行された朝鮮語テキストに現れた地図に着目して、4つの提示パターン別にその様相を示し、そこに反映される執筆・出版関係者の意識下／無意識下の意識について簡単な検討を行ったものである。その結果、南北朝鮮にまつわる理念と現実のはざままで商業出版物として編纂・刊行されたテキストが学習者に偶然出会い、そこでの朝鮮語観や朝鮮言語文化圏観の形成に一定の影響を及ぼしている様相の一端を明らかにした。

読者の皆様からの忌憚なきご意見、ご批判などをお伝えいただけたら幸いです。

執筆者一同